

アトリエ 琉游舎 だより 233号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2026年6月17日発行

入梅 送り梅雨 出梅 戻り梅雨

- 梅雨に入ると気持ちもなんとなく湿っぽくなり、気分も内向き、外出するのが億劫になります。これが一ヶ月ほど続くと、やはり夏が待ち遠しくなりますが、年によっては空梅雨もあっていつ梅雨が明けたかも分らずに真夏になることがあります。今年はどうでしょうか。
- 立春から135日目の日も「入梅」と呼ぶようです。暦の上ではこの日から梅雨に入ることです。江戸時代は入梅が田植えの日を決める目安でした。当時の暦は全て農事のためにあったのですね。今では殆どの田植えは五月の連休前後に済んでいるので梅雨も関係ありません。用水が整っているので、雨の降り具合も農事に大きく影響しないのかも知れません。
- 送り梅雨は梅雨明けの頃に降る雨です。この頃は雷を伴う集中豪雨もあり、雨と雷で梅雨を送り出すかのようです。そして出梅は梅雨明けのこと。でも時々戻り梅雨があります。特に東北太平洋岸から関東北部に吹く東北の冷たい風と小雨は「やませ」と呼び、長く続くと冷害の危険性があるので、やはり梅雨明け後はしっかりと真夏になってほしいものです。
- 晴耕雨読という言葉は、梅雨時期にふさわしい言葉です。朝から雨が降っていれば今日は散歩も何もしないぞと決めて、朝から屋根の下でゴロゴロ。気が向いたら本を開く生活。その代わり晴れたら畑の草取りと思うのですが、そうこうしているうちに太陽が高くなり、気温が上昇して熱中症の危険があると言って、またクーラの効いた部屋で何もせずに過す。雑草は雨の後の晴れた天気で一気に手に負えなくなるまで生長します。毎年草取りは手遅れになった状態の真夏の早朝。伸びる前にやっておけばよかったと思うのは毎年のことです。
- 送り梅雨があり、戻り梅雨の言葉があるということは、昔から人は梅雨の曖昧な気候にやきもきしていたということでしょう。自然はデジタルのように明確な境界があり、計算通りに変化していくものではありません。やきもきする心情が複雑に交差して様々な精神活動が生まれる一因と考えるならば、デジタルの権化であるAI利用は私たちの心情もデジタル制御されることなのでしょう。それもやきもきしないだけ平穏なことかも知れないのですが。

写経会 7/5 (日) 13時半 読書会 6/23・7/7 (火) 13時半

先日、シーズンには2ヶ月早い台風が日本列島に上陸しました。刷新された気象警戒レベルの周知もあり、前日から天気予報は台風の接近による気象警戒予報をしきりに放送していました。予報情報は災害への備えのためには大変重要です。しかしあくまでも予報ですから実際の天気と異なることは致し方ないことです。今回の台風では前日の昼過ぎには市内の小中高校の休校決定が出ていました。当日の天気がどう転ぶかわからない内の決定は早すぎるのかなとも思いましたが、転ばぬ先の杖と言うことなのでしょう。最近は何事も先手の危険回避判断が多くなりました。国や行政機関が指示をしてくれるので、自分たちでの判断機会が少なくなりましたが、指示待ちとなって、危機回避本能は衰えてきてしまっているのではないかと心配です。

台風接近の当日の天気は、雨は年に数回程度ある強い降り方、風は雨の降っているときは殆どなく、止んだ後に翌日まで強く風が吹いたぐらいで、冠水や倒木の被害も私の知る限りありませんでした。結局、休校にするほどの雨風ではなかったと言うことです。台風は予想ほど危険ではなかったということは結果論なのですが、昭和育ちの私は何か一日損をした気分になってしまいます。こう言う発言はもはや昭和の遺物なのでしょう。この間も、熊一頭の出没で51万の人口を有する県庁所在地の公立小中学高校の全てが三日間休校となりました。三日間の授業の遅れをとり戻すことは先生も生徒も大変です。また昭和の話を持ち出して恐縮ですが、私の小中高校生時代には自然の脅威で休校になったことは、大雪で一回あっただけと記憶しています。自家用車の普及していない時代なので、雨が降ろうが雪が降ろうが、傘を差しカッパを着て歩いてあるいは自転車で学校や駅に向かったものです。靴の中がびしょ濡れになっても、午前中の授業の半ば頃までに靴下も乾いていました。それでも親も子供も不満も不安もなくこれが当たり前のこととっていました。

昭和時代の話に意味があるとするならば、それは獲得したメリットに対して、失ったものは何かと言うことを考える機会ができることではないでしょうか。ノスタルジックな回顧ではなく、私たちの心身は何を選択し、何を取捨したのかを考えることです。自然の脅威について語るとき、現代は昭和に比べて遥かに脅威から守られる時代となっています。予想の進歩、国土強靱化と備えの強化で、私たちは以前に比べて遥かに安全に暮らせるようになりました。これは社会が豊かになり、私たちの生活もより安全で安心した日々が送れるようになったと言うことです。私たちは国や地域社会の行政力によって、自然の脅威や犯罪などから情報力を含め保護されているということなのです。国の国民保護力が向上してきた事実が私たちの得たメリットと考えられます。これは国が様々な選択の結果、国民が現在得ることのできた安全です。しかし選択は常に取捨と一体です。私たちが取捨してきた物は何か、それは矛盾するように聞こえますが選択する力だと私は考えます。私自身が選択した判断ならば私が取捨したのも私の判断です。しかし他者が私の判断に先回りして行なった選択は私の判断ではありません。だから他者が何を取捨したのかも私には分らないのです。

前回も引用しましたが再び法然上人の「選択本願念仏集」の言葉です。「選択とはすなわちこれ取捨の義なり」「選択と摂取とその言は異なりといえどもその意これ同じ」。これは一見すると矛盾する言葉のように聞こえます。選択と取捨と摂取は同義であると言っているのです。選ぶことと捨て去ることと全てを包摂することは同じ意味であるという言葉は集合の概念から見れば論理矛盾です。しかし私はこの考え方にこそ仏の慈悲と空（ありのまま）の本質があると考えます。論理的に考えれば選択することはある集合体から選択したこと以外を取捨すること、排除することです。選択されたものだけが選ばれたものとして次のステップに進むことができるのです。そして取捨されたものは捨てられ忘れ去られていきます。この考え方を押し進めていくと「選民思想」に行き着く危険性を感じませんか？しかし仏教においては、選択が選ぶのは方法論です。つまり私の選択は安らぎへの道へ辿り着くある歩き方を私自身が選択して進むためのものです。その他の歩き方を私は取捨しています。しかし仏の慈悲は私が取捨した選択も含めて全ての選択肢を摂取して、安らぎの処へ導いてくれるのです。私は選択して取捨します。その時仏は私の取捨した道を含めた全ての選択（大なるもの・宇宙）を摂取して仏の慈悲へと迎え入れてくれるのです。その仏は私自身の中にある仏なのです。ですから私は選択取捨したと同時に仏の慈悲の全てを選択摂取したことになるのです。この論理矛盾にみえかねない選択思想に支えられた私の信仰は、日蓮聖人の選択した法華經を選択したにもかかわらず、法然の選択を取捨しても排除することなく、私自身の安らぎへの道の歩みの中に摂取されているのです。

今ここで、仏教の選択の考えを現代社会に応用してみることで、私たちは何を取捨して、何を置き去りにしたり排除したりしていないかどうかを考えることも、意味のないことではないと思います。台風や熊の危険があることによる選択は、その危険が**我が身**に迫る確率が何%であるかを休校の判断としているのではなく、**誰か**に危機が迫る確率が限りなく0%にならなければ他の選択肢は採らないと言う選択だと、私には見えるのです。これを私は仮にデジタル選択と名付けようと思います。確率が0か100かのデジタル選択は、曖昧なアナログ的な選択判断、例えば悩みや逡巡、可能性の考察、データ解析など様々な考察と葛藤などの、その選択までのプロセスを全て排除してしまいます。それは私たちから考えること、調べること、判断することなどの自己判断を放棄させることにも繋がってしまうでしょう。逆にアナログ判断は私たちに考える力を与えてくれるはずで。それは生きる力と言い換えてもいいでしょう。迷い、悩み、考え、学び、そして決断する力だと思います。選択は私たち自身が**我が身**のためにするもので、与えられるものではありません。この仏教の「選択、取捨、摂取」こそ、私たちが今を生き抜くために必要な考えではないでしょうか。